

第1回 SPARC Japan セミナー2016

「オープンアクセスへの道」

趣旨説明

蔵川 圭

(国立情報学研究所)



蔵川 圭

<http://researchmap.jp/kurakawa/>



第1回 SPARC Japan セミナー2016 のテーマは「オープンアクセスへの道」です。これまで、日本の大学図書館は学術雑誌の価格高騰を原因としたシリアルズクライシスへの対応として、コンソーシアムを組んで大手海外出版社を相手にビッグディールという包括的な契約方式を実現させ、同時に、機関リポジトリによる雑誌論文のオープンアクセス (OA) 化と、ポリシー策定による組織内のルール化を行ってきました。

オープンアクセスをめぐる動向

現在の OA 化の主流な方法は二つです。一つは、購読料支払いを前提に出版社サイトからアクセスコントロールされている論文の公開に対し、機関リポジトリに出版されている論文のコピーや著者最終稿を掲載して無料でアクセスさせるグリーン OA と呼ばれる方法、もう一つは、article processing charge (APC) という論文加工料を著者が出版社に支払い、出版社が出版社サイトから論文を無料でアクセスさせるゴールド OA と呼ばれる方法です。

2012年に英国政府がゴールド OA を主体とした

Finch レポートを実現する意向を表明して以降、欧州ではオープンアクセスの在り方をめぐって、グリーン OA とゴールド OA を二極とする議論が沸き起こっています。英国内では、情報システム合同委員会 (JISC) が、購読料と APC が混在したハイブリッド誌のゴールド OA 化を促して、機関の総支払い額を抑えるオフセットシステムを導入したパイロット契約を実施しています。

オランダは自国の研究者が出版したシュプリングアの2,000誌の雑誌論文をゴールド OA 化することを決定し、エルゼビアとも同様の OA 化を約束しています。欧州委員会はオープンサイエンスポリシープラットフォームを推進する中で、ゴールド OA 化への道を探っています。

高エネルギー物理学分野では、SCOAP³という名の下、分野の主流な雑誌を対象にゴールド OA 化するビジネスモデルを開発し、実施しています。

一方で、セルフアーカイブを推奨し続けるスティープン・ハーナッドは、このように見境なくゴールド OA 化を進めようとしている現状に警鐘を鳴らし、

COAR はユネスコと共同で同様の声明を発表しています。また、さまざまなステークホルダーは、急進的なゴールド OA 化への懸念をブログ上に発信しています。

日本の取るべき戦略

こうした状況の中で、わが国はどう振る舞うべきなのでしょう。主要な学術雑誌の大半を欧州や米国のプラットフォームに依存しているわが国は、欧州や米国の OA 化への流れを避けて通ることはできません。これまでわが国にとっての機関リポジトリの存在意義を見いだしてきたのと同様に、ゴールド OA 化の在り方の議論とその反動としてのグリーン OA への回顧が必要です。

本日のセミナーでは、過去 10 年以上にわたって、次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業開始前から日本のオープンアクセスを牽引されてきた講師陣、オープンアクセス誌に投稿する現役の研究者をお招きして、OA 化の在り方と今後の日本が取るべき戦略を議論します。

なお、本セミナーは、情報・システム研究機構ライフサイエンス統合データベースセンター特任准教授の坊農秀雅先生、明治大学学術・社会連携部図書館総務事務室の西脇亜由子様、北海道大学図書館の梶原茂寿様と私の 4 名で企画いたしました。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。